

## 伝統中国における朝山進香—研究の現状と課題—

石川 重雄 (東洋文庫研究員)

**Chaoshan Jinxiang (Pilgrimage) in Traditional China - Issues and the Present State of Research****Shigeo ISHIKAWA****Research Fellow, Oriental Library**

This paper is an addendum to a previous one entitled, "Traditional Chinese Pilgrimages and the Pilgrimage to Tianzhu Jinxiang(Tianzhu Pilgrimage)" in *Junrei no rekishi to genzai* (The history and present state of pilgrimages) published by Iwata Shoin in 2013. The methods of researching the history of Chinese pilgrimages can be broadly divided into two categories. 1. research related to the history of exchange between China and Japan on the sea and 2. research related to individual regions within China. I will focus on the latter. First of all, the word *xiang* (incense) is important when looking at the concepts of pilgrimage within Chinese history. The word *jinxiang* (presenting incense) is used in present-day pilgrimages such as Chaoshan jinxiang, Haoding Jinxiang and Tianzhu jinxiang that focusses on a specific area. We must also pay attention that within the studies of Chinese religion, jinxiang performed within the country is called *Chaoxiang* and Western-style pilgrimages are called *Chaosheng*. Just like the *chunqiu ershe* (festivals of spring and autumn) seen during the Spring and Autumn period (770-476BC) in China we must deepen our understanding of *xianghui* (incense groups) and *xiangshe* (incense societies) as part of a community of religious services. To do so, one needs to do comparative research with *miyaza* (religious village community) of Japan. When we examine sacred site research of Chaoshan jinxiang which includes part Buddhism and part Confucianism, we can also observe the individual research of such places as Mt. Mianfeng, Mt. Putuo, Mt. Tai, Mt. Wudang and Mt. Tianzhu. And when we look at the pilgrimage to Tianzhu, which the author is investigating, we see that several Chinese researchers have presented about this topic, but it is unfortunate that academic papers in Japan have not discussed this topic thus far. Looking extensively at research done on Chinese pilgrimages Susan Naquin (韓書瑞) and others have done remarkable work on the pilgrimage to Mt. Miaofeng. Within the book "Pilgrims and Sacred Sites in China" they included and covered such topics as "Pilgrimages seen from a comparative historical view", "Chinese Jinxiang", "Appearance of Chaoxiang places within China" and the book summarizes pilgrimage research from anthropological, sociological and historical viewpoints. However, in regards to research on the history of pilgrimages in China it is necessary to discover and organize various historical materials. For example, 1. Materials related to daily life (encyclopedia of living), travel and transportation, 2. Pilgrim lodging facilities, support; 3. Laws (prohibitions), *xiangshui* [pilgrim tax], *panyu* (trial decisions); 4. Old photographs, pictures, illustrations; 5. Newspaper articles (for example, Shenbao - newspaper of the Qing dynasty); books; 6. Fieldwork. In regards to understanding the layers of society it is necessary to have a greater understanding of pilgrimages in China and it is imperative to have discussions beyond the fields of history, society, anthropology and ethnology. Another future topic of study includes the systemized research of Chaoshan Jinxiang.

## 1 はじめに

中国における巡礼研究も近10年の間に若手研究者の論考も公にされるようになり、やや研究者の裾野が広がりつつある。我が国では円仁『入唐求法巡礼行記』や成尋『参天台五臺山記』といった、国内の僧侶たちが大陸へわたり天台山・五臺山へ詣でる記録を対象とした研究が従来から主流であった。すなわち日中交流史、海域交流史に立

脚した研究といえる。筆者は、かつて杭州・上天竺寺の宋代における寺産、住持問題、径山寺との角逐などを中心にその興隆過程を分析した。爾来、その論考を基点として上天竺観音の信仰を母体とする「天竺進香」の明清時代より現代にいたるまでの状況を文献やフィールドワークによって考察し観察してきた。すなわち、これまでの日中交流史・海域交流史の立場よりも、むしろ大陸内の個別地域的な聖地巡礼研究を主眼としてきた。ここに伝統中国において展開されてきた各地の朝山進香の研究を整理する必要から、さきに「伝統中国の巡礼と天竺進香」<sup>(1)</sup>の論考(以下、「前稿」)を公にした。本報告は、そこに述べられなかったことをまとめ、その補論として提出したい。

## 2 中国史における巡礼用語

### (1) 巡礼から進香へ

唐代頃より官文書等に見られるようになった「巡礼」という言葉は、ほぼ同時代の史料に「巡遊」・「遊礼」・「遍(徧)礼」(敦煌文書P.4648、「五臺山巡礼日記」)とも記されていた。この中の「遍礼(徧禮)」は、前稿にも触れたごとく、わが国近世の四国遍路の指南書たる寂本『四国徧禮靈場記』や真念『四国徧禮道指南』、『四国徧禮功德記』などの書名に多用されている。筆者は従前より、近世の四国遍路のガイドブックに「遍路」ではなく「遍礼(禮)」が何故もちいられるのか疑問をいただいていた。この点、真念『四国禮道指南』の全訳注を刊行された稲田道彦氏の「訳者まえがき」<sup>(2)</sup>には、つぎのような説明がみられる。

江戸時代には四国遍路を表すのに、この漢字表記(徧禮)が使われることが多かった。のちに現在の表記と同じ「遍路」に変わっていくのであるが。…(中略)…

「徧」は広くゆきわたるとか、あまねくという意味で、遍と同じ意味である。「禮(礼)」は、たんなる道ではなく、人として生きる道という意味を含んでいる。路が人の通行する道を示すのに対して、禮の字を使ったということは、「へんろ」という行為に人の道を求める修行者という意味を込めたかったのであろう。

「禮」より前には、「邊路」の文字が使われることが多かった。

稲田氏的全訳注は筆者自身啓発させられるところが多いのだが、叙上の「遍礼(徧禮)」問題については些か異見をもつので触れておきたい。真念らは中国の仏典典籍(真経・偽経を含む)の影響を受けており、真念らが四国遍路に「遍礼(徧禮)」を使った背景には中国の仏典典籍の言葉や語義が色濃く投影されているのではないかと考えている。もう少し狭めるならば唐代の不空・義浄・道宣ら、とりわけ真言密教付法の第六祖不空の訳出とされる仏典の影響が大きかったのではないかと推察する<sup>(3)</sup>。諸種データベース<sup>(4)</sup>を繰ってみると「遍礼(徧禮)」の語彙は、南北朝時代の訳出仏典より初見し、唐宋時代になると不空訳をはじめとする仏典典籍に頻出し、「遍礼(徧禮)十方」「遍礼(徧禮)諸佛」「遍礼(徧禮)一切諸佛菩薩」「遍礼(徧禮)十方諸佛菩薩」などと見え、明清代頃に編纂される仏寺志、仏教典籍にも多用されることがわかる。真念らは仏典のなかの「遍礼(徧禮)」を「へんろ」に重ね合わせたのではないだろうか。

つぎに進香であるが、『宋史』巻36、光宗本紀、紹熙3年10月辛亥に「帝、重華宮に詣で進香す。」などとみられるごとく、宋代では皇帝や皇太子らが城内外の寺廟等へ参拝し焼香することを進香と呼んでいた。ここから民間社会へ進香という言葉が流入し、普及定着し、今日の巡礼にひとしい語義をもつようになったものと理解する。すなわち庶民の習俗としての進香は実質的に宋代頃に開花し、明代以降進香の集団化・組織化とともに成熟していった、と。中国の「巡礼」が「香」と結びつくことは前稿でも述べたが、こんにちの大陸(殊に福建省)や台湾において進香は、たんに寺廟等へ参拝し焼香することだけではなく、香炉・香火炉を持ち、あるいは地元で祀られる神仏(神仏名を書き込んだ幟や旗)を持参して、寺廟の神仏にかざして焼香礼拝し神仏の霊(神明)と接触することをもいった。台湾における進香では新たに別の子院・子廟を祀る時、本山・祖廟の香炉の香灰を分けたりして用い、これを「分香」と呼ぶ。子院・子廟は分神を携え年一回、或いは数年一回本山・祖廟に行きその香火に触れ霊力を回復させる。その際の儀式もある。子院・子廟の香炉は本山・祖廟の香炉と並置され、本山・祖廟の灰を掬い入れる。これを「割火・掬火・乞(請)火・合火」という。その後、両香炉を引き離し、剣で煙を切り分割する所作をして持ち帰る。これを「割香・刈香」<sup>(5)</sup>という。台湾での民間信仰は福建省系や客家系などの移住者や救済される種類により、保生大帝(泉州)・開漳聖王(漳州)・媽祖(海上交通)・王爺(疫病)など多岐にわたりそれぞれに進香が展開される。このほか夭逝した未婚女性(慣習として実家の墓内で祀られない)や客死者など無縁墓地に葬られる、子孫により祀られることのない魂が鬼となるものを鎮める「有応公」<sup>(6)</sup>なども諸処で祀られ、これも福建省地域の影響を受けている。進香形態もその儀礼とともに変容する様子が見えてくる。

大陸でのフィールド調査等を通じて知られるように、一般的巡礼は「朝山進香」と呼ばれる。「朝山進香」は遠方の

靈驗ある聖地・名山・寺廟へ行き、香を焚き礼拝することをいい、「朝香」「朝山」とも略称される。北京西北の妙峰山を主体とする巡礼は「朝頂進香」といい、これが華北地方特有の呼称であるかは筆者自身まだ確認していない。これらとは別に杭州・上天竺寺を主体とする巡礼があり、「天竺進香（天竺香市）」と呼ばれる。なお中国の宗教学（比較宗教学）などでみられるように、国内で展開される巡礼を「朝香」といい、西欧等諸外国キリスト教圏でのpilgrimageを「巡礼」ではなく「朝聖」と訳出して区別する場合もある。

## (2) 祭祀共同体としての「社」「会」と日本の宮座の理解

進香と関連して祭祀共同体としての「社（香社）」「会（香会）」の問題も重要となる<sup>(7)</sup>。歴史的には、先秦時代から春秋二社が知られる。社の起源には土地神とするなど諸説あるが、春秋の季節祭は慣習・風俗等の差違性をこえて集団の凝集性を高め親睦を深め、結婚・交易等の大切な機会となったとされる。魏晋南北朝時代になると、仏教・道教が浸透し造像・講経・写経の目的による邑会、義邑系の社が生まれる。唐・五代においても、読経・齋会を行い数多くの義邑が集まった。法社（社邑）も現れ、幽州において房山雲居寺の石経事業を支えた。敦煌文献においても世俗化した多様な社邑、社会が出現し、初唐の造仏を主体とする活動から中唐以後の読経・写経・齋会への活動へと変遷をみた。宋代から明代では、浄土教・禅宗・道教系の社・会が出現し、趣味・親睦のための社・会が多数登場した。宋代においては1万人に及ぶ社や女性のみのもみられ、とくに杭州西湖周辺の結社活動が盛んであった。清代から民国時代では、豊富な記録が残り、社での身分差は表面化せず、凝集性を支えるのは経済よりむしろ宗教・地縁であり、社は近隣の秩序維持というミニマムな行政を執行するが、最大の比重は祭祀行事におかれるという（斯波義信氏）。この「社（香社）」「会（香会）」と日本の中世以来の祭祀共同体「宮座」<sup>(8)</sup>との比較研究もみられる。安易な比較は慎むべきだが、アジアにおける巡礼と祭祀共同体を考える上で、さらなる両者の検討は必要であろう。

現代の社の活動であるが、進香との関わりから太田出・佐藤仁史両氏の太湖流域の調査研究が有用である<sup>(9)</sup>。太湖流域の漁民の社が、筆者の調査主体である天竺進香とつながりをもつ。2009年の天竺進香調査において、「蘇州府太湖興隆社 進香」の旗を掲げる香客と出会った【図1】。太湖興隆社は太湖流域の漁民の主要な社であり、その進香活動のなかに「杭州 観音菩薩は漁民にとって至高無上の神である。毎年2月19日と9月19日前後、漁民は自ら組織的に杭州へと赴き焼香する」と説明される（太田・佐藤、190頁）。これこそ杭州・上天竺寺観音を詣でる天竺進香の活動である。ふつう観音菩薩には誕辰（農曆2月19日）、出家（農曆6月19日）、成道（農曆9月19日）と年3回の祭りがあるが、興隆社では6月19日の進香がないのであろうか。こんにちの「社（香社）」「会（香会）」の進香活動の研究には、前稿でも述べたように妙峰山・泰山・武當山等を主体とするものがある。



【図1】

## 3 朝山進香の聖地と研究—天竺山を中心に

茫漠たる中国大陸においては道教的であれ仏教的であれ、当地へおもむき祈りをささげる対象となる信仰の「場」がふるくから形成された。これには山岳信仰が基点となる。先秦時代より五岳（五嶽）が形成され、漢代より国家祭祀（皇帝祭祀）がみられる。五岳には変遷があるが、こんにち東岳の泰山（山東）、西岳の華山（陝西）、南岳の衡山（湖南）、北岳の恒山（山西）、中心の嵩山（河南）が配置される。やがて仏教においては四大聖山—五臺山（文殊信仰）、普陀山（観音信仰）、峨眉山（普賢信仰）、九華山（地藏信仰）が形成されている。

前稿では明代以降における朝香地の形成として、まず北京の西北に位置する妙峰山の研究を取り上げた。妙峰山は碧霞元君（東岳大帝の娘、泰山娘娘）の信仰で知られ、旧暦4月18日の誕辰が人々にでぎわう。妙峰山においては1925年、北京大学の顧颉剛ら5名によって民俗学的調査研究が始まったとされる。こんにちSusan Naquin（韓書瑞）が精力的に調査研究を行っている。つぎに舟山列島の観音霊場、普陀山の研究を挙げた。近年、石野一晴氏ら若手の研究が公にされている。泰山は漢代以降、五岳の中心であり東嶽大帝を祀り、のち碧霞元君が祀られる。ふるくはChavannes, Edouardの論著があり、近年は葉濤の香社研究がまとめられている。武當山は湖北省にあり、真武神信仰を中心とする。明代には永樂帝による復興事業がすすめられ、太和山と改名された。武當山における進香活動は近年、梅莉の研究がみられる。上天竺観音の信仰を主体として、長江デルタ農民・漁民を中心とする



進香活動がみられる天竺進香の研究については前稿では紙幅の関係から割愛したので、ここに付記しておきたい。

#### 【日本における天竺進香研究】

筆者が杭州・上天竺寺に関する研究を公にした翌年、鈴木智夫氏による杭州進香（天竺進香）の論考が発表された。鈴木氏の関心はもっぱら進香と地域経済の問題であった。その後筆者は、やや年数を経たが天竺進香の現地調査を開始し、報告をかさねてきた。

鈴木智夫「明清時代江浙農民の杭州進香について」『史鏡』13、1986年。石川重雄「宋代杭州上天竺寺に関する一考察」『社会文化史学』21、1985年。同「宋代勅差住持制小考—高麗寺尚書省牒碑を手がかりに—」『宋代の政治と社会』汲古書院、1988年。同「宋代祭祀社会と観音信仰—「迎請」をめぐる—」『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院、1993年。同「巡礼者の道と宿—伝統中国の巡礼」『月刊しにか』第4巻第9号<特集 巡礼の生態学>、大修館書店、1993年。同「中国“天竺進香”への誘い—1200年の時空を超えた上天竺観音—」『第1回四国地域史研究大会 公開シンポジウム・研究集会報告書』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編、2009年。同「宋代上天竺寺与上天竺観音信仰」(何忠礼主編『南宋史及南宋都城臨安研究』下、人民出版社、2009年)。同「上天竺観音信仰と天竺進香の現在—伝統中国の巡礼と社会」(『四国遍路と世界の巡礼、その歴史的諸相の解明と国際比較』国際シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学、2010年)。同「伝統中国の巡礼と天竺進香—宋代より現代に至る杭州・上天竺観音信仰—」『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』岩田書院、2013年。

上天竺観音の近年の絵画史研究として、岐阜県永保寺所蔵の千手観音像図像問題が論争となっている。

増記隆介「永保寺所蔵絹本着色千手観音像の図像と表現—「天竺観音」との関わりを中心に—」『仏教美術論集I 様式論』竹林舎、2012年。梶鞍子「永保寺の千手観音図」『図華』第321、1917年。「千手観音像」解説『日本国宝全集』第20輯、1925年。海老根聰郎「宋元時代の観音図」(国際交流美術史研究会『国際交流美術史研究会第5回シンポジウム 観音—尊像と変相—』1986年)。井手誠之輔「千手千眼観音像軸」解説(嶋田英誠・中澤富士雄編『世界美術大全集 東洋編 第6巻 南宋・金』小学館、2000年)。同『日本の美術 四一八 日本の宋元仏画』(至文堂、2001年)。同「礼拝像における視覚表象 宋元仏画の場合」(『死生学研究』第16号、東京大学大学院人文社会系研究科、2011年)。羅翠恂「岐阜永保寺千手観音像—杭州の上天竺寺靈感観音像依拠説の検討—(発表要旨)」(『奈良美術研究』第4号、早稲田大学奈良美術研究所、2006年)。

#### 【海外における天竺進香研究】

近年の若手として王健氏の研究があるが、総じて日本の研究動向の把握がやや希薄である印象をもつ。

徐一智「明代上天竺講寺観音信仰之研究」『法光學壇』7、2003年。同「明代上天竺講寺所獲得的捐獻之研究」『史匯』7、2003年。蔡禹龍「清代江南香市簡論—以杭州西湖香市為中心」『歴史教学』2010-20。王健「明清以来杭州進香史初探—以上天竺為中心」『史林』2012-4。李永斌「南宋時期天竺観音信仰的流传与影響」『人文雜誌』2015-9。

なお、定源氏による天竺靈籤の本格的な研究が最近公にされている。天竺靈籤（天竺百籤）は上天竺観音の御籤で日本の比叡山延暦寺の御籤に取り入れられ、元三大師信仰と結びつき、近世に御籤本としての出版が流行した。

定源（王招国）「有関《天竺靈籤》的考察」（上海師範大学哲学学院敦煌学研究所『経典・儀式與民間信仰国際学術研究会論文集』2014年）。

## 4 Susan Naquinらの研究

Susan Naquin（韓書瑞）とChün-Fang Yü（于君方）両氏の共編で『中国の巡礼者と聖地』（カリフォルニア大学出版、1992年）が刊行されている<sup>(10)</sup>。Susan Naquinはプリンストン大学において中国宗教史、妙峰山の進香研究で知られる。Chün-Fang Yüはコロンビア大学において同じく中国宗教史、観音信仰研究を専門とする。同書は、以下のごとく9章にわたる論文を集成した論集である。

（目次）

序文： 比較史的視角よりみた巡礼、中国の進香、中国における朝香地の出現

1章 泰山への女人進香—17世紀小説よりみた—

2章 17世紀泰山の二面性をもつ進香



- 3章 五臺山と張商英
- 4章 遺物と生身—禅巡礼地の創造—
- 5章 普陀山—進香と中国的補陀落の創造—
- 6章 巡礼絵画としての黄山壁画
- 7章 武當山の進香
- 8章 北京妙峰山の進香—香会と聖地—
- 9章 北京毛主席記念堂—暗示された巡礼の苦難

同書は中国における進香研究にとり必読すべきテキストであり、我が国における同書にたいする書評も出されていないようなので、ここに簡単に紹介しておきたい。まず同書冒頭では「比較史的視角よりみた巡礼」において世界の巡礼を概述する。ここでは巡礼研究に影響を与えた人類学者 Victor Turner について、以下の言及がある。Victor Turner は社会、人間関係のあり方をストラクチャー structure (構造。政治上、法律上、経済上の地位体系、多少とも差別される) とコミュニタス *communitas* (反構造。無構造、比較的分化されていない共同体、平等な個人) として説明し、巡礼は後者の範疇に位置づけた。同書は以下のごとく述べる。

「早期にアフリカでフィールドワークを行った経験を持つ人類学者、Victor Turner は、ヨーロッパおよびメキシコ・マリアナ巡礼の研究に目を向け、1970年代にこの分野における研究の第一人者として台頭した。巡礼者の経験への関心を持った人類学者 Arnold von Gennep の通過儀礼の段階 (離別、移行、含有) のスキーマに刺激を受けた Turner は、巡礼を「社会的過程」と捉えた。巡礼者は家を出発し、聖地への旅行中に境界に足を踏み入れ、変容した上で、元のコミュニティに改めて組み込まれると説明したのである。旅の期間中、巡礼者は通常の社会の「構造」から自らを解放し、異なる形式の関係性形成に貢献する。そのクライマックスには、Turner が平等主義的で区別がなく、制約のない「コミュニタス」と呼ばれるものが巡礼者の間で生まれる。ただし構造とコミュニタスは相対するものではなく、弁証法的に連続したものとして理解された。

この洗練された魅力的な理論的モデルは、巡礼を力強く—そして普遍的な—変容の経験として浮かび上がらせる。その結果、現代における巡礼研究の先駆者として Turner は他を寄せ付けぬ大きな影響を与えた。多くの研究者が Turner モデルの検証を試み、中にはその理論に疑問を呈し、これを修正する者もいた。例えば、タイの仏教、モロッコのイスラム教、ベンガルのヒンズー教をそれぞれ研究していた Pruess、Eickelman、Morinis は、巡礼が境界を創出すると理解できるものの、Turner 理論の重要な点であるコミュニタスの経験が欠如している場合もあることを見いだしたのである。Turner 理論に賛同するにせよ、反対するにせよ、多くの研究者がその論に触れるの必要性を感じたのである。対照的に、巡礼地の周辺性と中心性の弁証法的関係や、巡礼現象の増加と減少のダイナミクスに関する Turner のその他の洞察や仮説は、学問的注目をほとんど集めなかった。

Turner は、巡礼に関する多種多様な理解が混在する状況の中で、一般的なモデルを抽出することによって大いに貢献した。その結果、特に人類学者の学問的関心の多くが巡礼者の経験の根底にある類似性に向けられ、相違点や場所そのものから乖離していった。我々は以下に詳細に述べる理由から、今こそ巡礼の混乱を再検討し、不快な状況に再び耳を傾ける時であると考える。」 pp. 6-7

Victor Turner のコミュニタス論に反駁し、人類学者の学問の多くが巡礼者の経験の根底にある類似性に向けられ、相違点や場所そのものから乖離してしまった点を暗に批判する。

また「中国の進香」のなかでは上述した朝山進香、香の言葉について述べる。

「巡礼に行くという意味の中国語の表現—*ch'ao-shan chihsiang* 朝山進香—は、旅を意味するわけでも、巡回を意味するわけでもない。*Ch'ao-shan* は、大衆が支配者を尊敬するように、「山に尊敬の念を示す」という意味である。*Chin-hsiang* 「香を捧げる」とは、神と接触するために香を持ち、これに火をつける行為を指す (これに対し *shao-hsiang* 焼香「香を焚 (た) く」は、家庭の仏壇あるいはコミュニティにある寺院での日常の礼拝を指す)。いずれの用語も、権力のある神に対する貪欲な請願者の従属関係を意味する。

香への言及は、巡礼に関する言語に多く見られる。神の前に置かれた香炉 (*hsiang-lu* 香鑪) は、寺院における儀礼の中心地を定義するものである。巡礼者は *hsiang-k'o* 香客 (香の訪問者)、その組織は *hsiang-hui* 香会 (香の組織) と呼ばれる。寺院や教団の人気は、その「香の火 (*hsiang-huo* 香火)」の大きさで表され

る。現代の台湾では、香に関する言語は寺院と同一の神をつなげるものとなっている。数多くの教団において、本山からの香灰は新たに建設された別院に持ち出され、新たな台に火を灯すために用いられる。これは「火を分ける (*fen-hsian* 分香)」と言われる過程である。この関係を改めるため、別院の信徒は年に一回本山に巡礼し、改めて入れるために灰を持っていき、自らの釣り香炉に煙の香を戻す（これは「香を割る (*kohsiang* 割香)」と呼ばれる。)」 pp. 11-12

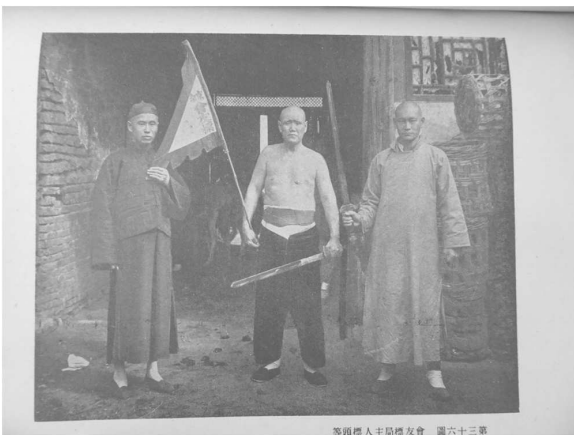
朝山進香のもつ意味内容の説明にも耳を傾ける必要がある。序文における3つの文章「比較史的視角よりみた巡礼」、「中国の進香」、「中国における朝香地の出現」の内容は、いずれ日本文に翻訳すべきものと考えている。

## 5 巡礼関連史料の発掘と整理

明清時代以降、組織化された進香が行われてきたが、今後様々な関連資料を発掘して整理する必要がある。以下には、幾つかの項目ごとにまとめておきたい。

### (1) 日用類書 (日用百科全書)、旅行・交通案内<sup>(11)</sup>

宋元時代から明清時代にかけて庶民や商人らの階層を対象にした百科全書が陸続と公刊された。中国では類書と呼ばれ、それを用いた研究の先駆者である仁井田陸氏は日用百科全書と称した。その後仁井田氏の研究を引き継いだ酒井忠夫氏は、日用類書として研究成果を発表していった。この時期、士農工商の相互間の壁は大きく崩れ、社会階層間の流動・周流といった社会移動現象がつづいたといわれる(斯波義信氏)。こうした社会現象を背景に、科挙受験生の教養の手引き、旅行の心得、書翰の雛型、契約文書式、訴状の文章用例、仏教・道教の儀礼、医薬関連、農業方式、などの日常の実用情報を扱った多種多様な百科全書がまとめられた。なかでも各地を移動する商人たちの諸規範をまとめたものは、寺田隆信氏の研究において商業書として括られた。具体的に幾つか挙げれば、宋元時代には『新編群書類要事林廣記』『居家必用事類全集』などあり、前者には旅行必携の心得も記される。明清時代になると数多くの日用類書がみられ、代表的なのは『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』であり、その内容も商旅門・律令門・算法門・僧道門・医学門・農桑門等、多彩である。このほか路程書とも称される『新刻客商一覽醒迷天下水陸路程』などもある。日用類書を進香に関連してみれば、旅行の心得や商人たちの往来する街道等が資料となろう。日本にも江戸期の八隅蘆菴『旅行用心集』があり参考となる。



【図2】

つぎに進香や旅行中の安全対策としてのボディガードについて触れてみたい。

清代には人の依頼をうけて財物の護送や旅客の護衛を担う標局と呼ばれる組織があった。標局については加藤繁氏の文章「標局」があり、写真(【図2】)とともに説明されている<sup>(12)</sup>。加藤氏によれば標局の組織は、武芸に秀でた標頭とその手下の標手に分かれ、標頭と標手を一括して標客という。標局にはテリトリーがあった。おそらく進香の場合も、特に女性の進香もあるため、何らかの護衛を必要としたであろう。標局の歴史をたどってみるならば、南宋時代の判例集『名公書判清明集』巻14、覇渡、「客人范景山訟益陽徐教練等打檐仗(客商の范景山、益陽県の徐教練ら

に護衛の者を殴打されたと訴えたこと)<sup>(13)</sup>にみられる「檐仗(杖)」も護衛のことを指すのであろう。また同時代の『宋会要輯稿』方域13-15にも渡し場の船賃の記事中「檐仗・轎馬」とみえるので、当時各地を移動する商人等に護衛がいたことは、ほぼ間違いない。

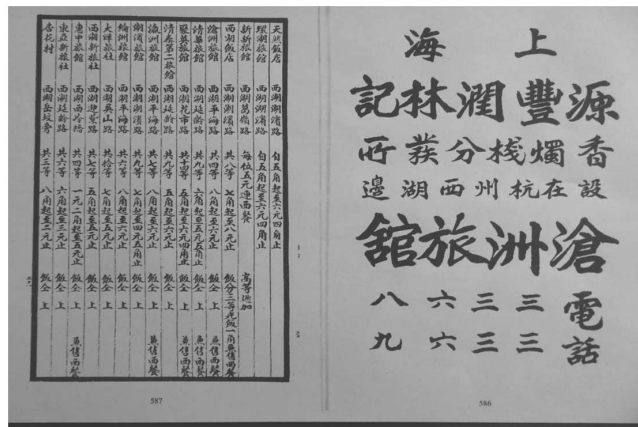
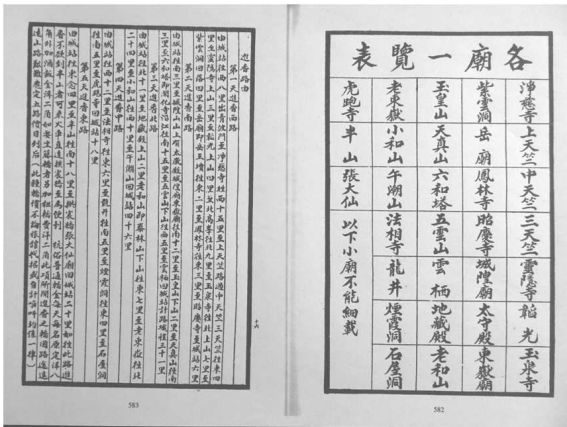
### (2) 巡礼宿としての普通院、接待庵(院・寺)、施水庵<sup>(14)</sup>

すでに幾つかの論考で明らかにしたように、唐代では五臺山巡礼ルートに普通院、普通禅院とよばれる施設が点在していた。これらには院主がいるが木賃宿のごとき質素なものであつてことがうかがわれる。ところが宋代になると江南を中心に接待庵(院・寺)、施水庵と呼ばれる施設が、城域や郷村各地に広がっていった。接待庵(院・寺)、施水庵は普通院に比べ、僧俗を受け入れ積極的な接待を供与していた。南宋の『咸淳臨安志』をはじめとする宋元時代の地方志から頻出し、明清時代の地方志及び諸史料にその記事が見られ

る。宋代にこうした施設が普及する背景には、禅宗五山第一の径山寺の果たした役割が大きく、また宗室の南渡前後に活躍した浄土教の画僧思浄のはたらきも影響していた。接待庵（院・寺）、施水庵の施設ならびにその思想は、鎌倉時代に渡宋した僧侶たちによって我が国にももたらされ、中世社会へと波及していった。

(3) 巡礼ガイドブック

『民間私蔵 中国民間信仰民間文化資料彙編』第1輯（台北・博揚文化事業有限公司、2011年）に収載された「武林進香須知」と題する史料がある。内容を一瞥すると、解放以前（清末?）の杭州における天竺進香の巡礼ガイドブックであることが判明する。武林というのは、もともと杭州エリアを虎林とっていたが、唐代になり初代高祖李淵の祖父李虎の諱を避けて武林としたのが由来とされる。本史料の冒頭、天竺進香の「縁起」があり、その中で「武林進香録」という指南書の存在も記されている。「武林進香録」は、上海図書館所蔵のようで叙上の王健「明清以来杭州進香史初探—以上天竺为中心」の中でも引用されている（「武林進香須知」については言及が無い）。「縁起」のつぎには天竺進香の「特色一～四」、進香対象となる寺廟写真、境内図、杭城、西湖形勢（一）、西湖十景、西湖物産、各廟一覧表、進香路由（【図3】）、杭地車輪船價目表と続き、さいごに西湖飯店等の旅館一覧と宿泊料金、飯代が列記される（【図4】）。このような進香ガイドブックも各地の図書館や檔案館に収蔵されている場合がある。



【図3】

【図4】

(4) 公的文書や法令—禁令、香税、新聞

a) すでに叙上の鈴木智夫「明清時代江浙農民の杭州進香について」のなかで引用されているが、政府の禁令のなかに進香を対象としたものが含まれる。以下は風紀上、進香舟隻における男女混雑を取り締まったもの。『江蘇省例三編』（光緒癸未四月、江蘇書局刊版）藩例、禁進香舟隻告示「布政使譚 為重申禁令事。照得各處進香舟隻、呼朋引類、男女混雜、既耗資財、又傷風化、甚至扯旗放炮、服色違制、種種惡習、實堪通恨、……光緒六年十二月初六日」。

b) 澤田瑞穂氏によれば、香税とは進香税の略で、善男善女の香客から入山料・参拝料を徴収する特別課税をいう<sup>(15)</sup>。香銭ともいう。香銭は国家財政を補う課税として成立し、山東の泰山では明代から清代まで二百数十年その徴税がつづいた。湖北・武当山（太华山）その他の廟にも香税の制度があった。明・查志隆編『岱史』巻1 香税志には、香税の制度について「徴税官の定員」「係官の任期」「香税銀徴収規定」「寄進物品処分規定」「香税配分規定」の5項目にわたり述べられている。例えば「香税銀徴収規定」についての梗概を示せば以下の通り。「旧規定では、本省の参詣者は一名につき五分四釐、外省からの参詣者は一名につき九分四釐と定められ、店戸（宿屋の主人）が参詣者に同行して役所に出頭し、許可証を受領して登山する。その後内外省を区別せず一律に香税銀八分と改められた。」このほか、進香、すなわち巡礼を対象とする税として、「焼香客人銭」（宋代）などの事例もみられる。

c) 「申報」は同治11年（1872年）に創刊された清朝時代の新聞であり、1949年まで発行された。天竺進香の記事も創刊された翌年第267号（1872年3月14日）より多数みられる。王健「明清以来杭州進香史初探—以上天竺为中心」の中においては、「申報」を利用して朝山進香の禁令について考察されている。





### （5）古写真（老照片）・絵画・地図

天竺進香に関連したものに限り言及するならば、『京杭大運河図説』（杭州出版社、2006年）や『杭州運河風俗』（杭州出版社、2006年）のなかに、貴重な古写真（老照片）等がみられる。例えば天竺進香において「松木場」と呼ばれる地は、現在は埋め立てられて幹線道路となっているが、明清時代の史料には運河における船の停泊場とされており、太湖周辺の農民たちが船を利用して天竺進香を訪れる拠点となっていた。『京杭大運河図説』には20世紀初頭の「松木場」（【図5】）が載せられ貴重な資料となっている。

【図5】

### （6）海外の旅行記

来馬琢道『蘇浙見学録』（鴻明社、1913年）も大正2年（1913）に中国へわたり寺々を参観巡拝した紀行文で、杭州・天竺進香の様子も克明に描写され香客のスケッチも添えられる。イギリス人のイザベラ・バード『中国奥地紀行1』（平凡社、2013年）も杭州の靈隠寺の記事があり、「年間一〇万人もの参詣者をひきつけている〔天竺詣〕とあるが、原書を見ると〔天竺詣〕の記述がないので、訳者が注記したのであろう。

### （7）小説類

明・馮夢龍『醒世恒言』第三卷、売油郎独占花魁や同じく明・陸人龍編『型世言』卷之三、烈婦忍死殉夫賢媼割愛成女などの小説類には、天竺進香をする様子やそのルートが描かれる。こうした小説類においても当時の社会が反映されている。

### （8）現地調査

筆者は、ここ5年の間、細々であるが天竺進香の調査を行ってきたが、寺院の監院や香客ら関係者の聴き取り調査が中心となる。現地へ行き、古地図を頼りに進香ルートを巡ることも試みた。いずれにせよ開発のスピードがはやいので、古跡が年々失われていく様子を目の当たりにする。

## 6 おわりに

中国各地で展開されてきた進香すべてにわたり論じることにはできないが、諸種の進香研究を通じた中国における基層社会の解明が課題となろう。そこには歴史学のみならず、民俗学や人類学との対話が必要であり、多元的史料の発掘を続けていかなければならない。筆者は天竺観音の信仰からはじまる天竺進香の調査研究を行い、いきおい仏教寺院の調査が主体となっていたが、近年道教の聖地と巡礼研究に関するプロジェクト<sup>(16)</sup>もスタートしたようである。いずれ朝山進香研究の体系化が期待される。

### 註

(1) 『巡礼の歴史と現在』岩田書院、2013年。本稿では、大会発表後に調べて明らかになったことも補筆している。

(2) 眞念/稲田道彦訳注『四國徧禮道指南』講談社〈学術文庫〉、2015年。

(3) たとえば、唐・不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』、『金剛頂経瑜伽文殊師利菩薩法』など。遍礼は『入唐求法巡礼行記』卷3開成5年5月17日条下にも「老宿云、『昔者、日本國靈仙三藏於此亭子、奉見一萬菩薩。』遍禮訖、到閣院、見玄亮座主。」とあり、また正史の初出と思われるが『旧唐書』卷23貞觀6年条に「又議設告至壇曰、『既至山下、禮行告至、柴于東方上帝、望秩遍禮羣神。今請其壇方八十一尺、高三尺、陛仍四出。其禪方壇及餘儀式、請從今禮、仍請祭祭、望秩、同時行事。』」とみえる。

(4) 『文淵閣《四庫全書》電子版』迪志出版社、1999年、『CBETA 電子佛典集成2016年版』中華電子佛典協

会、中央研究院・歴史語言研究所『漢籍電子文獻資料庫』など。

(5) 聶莉莉氏は福建省晋江市安海鎮に位置する龍山寺の割香の盛大な儀式の様子をつぎのように報告している。「観音は12年に一度「割香」を行う。そのさいに、安海では盛大な送迎儀礼が行われる。観音の実家は浙江省普陀山にあり、干支の龍の年観音誕生日の前に観音が里帰りをして親族と団欒する。龍山寺は、観音が出発する数日前から、普段よりさらににぎやかとなり、高甲、南音などの地方劇が連日上演され、信者も続々と観音を参拝する。出発の当日、各境の「境主」をはじめとするあらゆる「神明」や、獅子舞や龍踊りの芸人、五音楽隊や管弦楽団、何百何千の善男善女などによって構成された歴大な見送りの部隊が、龍山寺に集合する。時刻になると、鉄砲を打ち、爆竹を鳴らし、そして龍山寺鐘鼓楼の鐘も鳴らして太鼓もたたいて、観音の神輿を先頭にして出発する。堂々たる列は長く、時には5キロメートルも続き、盛大なパレードとなる。…」。「閩南農村における神々信仰—福建省晋江市農村での実地調査に基づいて—」『国立民族学博物館研究報告』22-3、1998年。

(6) 昨年12月末福建省調査の折、南靖土樓を訪れ、族長の簡良發氏にこの地の「有応公」の小祠を案内していただいた。

(7) 斯波義信「中国の祭祀共同体について」『社会経済史学』44-3、1978年。陳寶良『中国的社与会』浙江人民出版社、1996年。

(8) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究〔増補版〕』吉川弘文館、1975年、安藤精一『近世宮座の史的研究：紀北農村を中心として』吉川弘文館、1960年、安藤精一「農村共同体と宮座」・斯波義信〔コメント〕「中国の祭祀共同体について」『社会経済史学』44-3、1978年。

(9) 太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究—地方文献と現地調査からのアプローチ』汲古書院、2007年。とくに「太湖流域漁民の「社」「会」とその共同性—吳江市漁業村の聴取記録を手がかりに—」（太田出185～236頁）。土神については濱島敦俊『総管信仰—近世江南農村社会と民間信仰』研文出版、2001年参照。

(10) Susan Naquin and Chün-Fang Yü, *Pilgrims and Sacred Sites in China*, University of California Press 1992.

(11) 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』国書刊行会、2011年。斯波義信『『新刻客商一覽醒迷天下水陸路程』について』（『森三樹三郎博士頌寿東洋学論集』同記念事業会、1979年）。楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程図引・客商一覽醒迷』（山西人民出版社、1992年）。山根幸夫「明代の路程書について」『明代史研究』22、1994年。山根幸夫「楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程図引・客商一覽醒迷』」『東洋学報』75—1・2、1993年。水野正明『『新安原板士商類要』について』『東方学』60輯、1980年。Timothy Brook, *Geographical Sources in Ming-Qing History*, Ann Arbor : Center for Chinese Studies, University of Michigan, 1988.

(12) 加藤繁「標局」『社会経済史学』4—6、1934年。のち同『支那学雑草』生活社、1944年に収録。このほか黄鑿暉等篇『山西票号史料 増訂本』山西経済出版社、2002年参照。

(13) 「到處渡頭、結托無賴之徒、騙脅客人、要勒錢物。稍不如意、群然毆打、無異劫掠。徐汝德雖不在旁、平時糾集、此實主之、當以威力使人為首。客人非甚不得已、豈能越數百里求直于官。徐汝德・董一、各勘杖一百、放。」〔そここの渡し場では、無賴の徒と結託して客商を脅しては錢物を要求する。少しでも思い通りにならないと、徒党を組んで殴りつける。略奪と変わらないのだ。徐汝德は現場にいなかったとしても、常日ごろより悪党どもを集めているので、彼が黒幕であることは間違いなく、その力に物を言わせて人を使いやらせた首謀者である。客商は余程のことがないかぎり、數百里を遠しとせずお上に訴え出ることがあるうか。徐汝德と董一は各々勘杖一百としてから釈放せよ。〕

(14) 石川重雄「宋元時代の接待・施水庵について」『史正』17、1988年。同「宋元時代における接待・施水庵の展開—僧侶の遊行と民衆教化活動—」『宋代の知識人—思想・制度・地域社会』汲古書院、1993年。同「喻弥陀思浄伝考—宋代浄土教画僧の生涯—」『高橋継男教授古稀記念 東洋大学東洋史論集』汲古書院、2016年。

(15) 澤田瑞穂「泰山香税考」『中国の民間信仰』工作舎、1982年。

(16) 科研費・基盤研究(B)「中国道教における聖地と巡礼に関する総合的調査と研究」(代表・土屋昌明、2016-2019年)。